

破局噴火と歴史における記録と文芸（補足）

超巨大噴火が自然界、人間社会に甚大な影響を与えることを見てきたが、書洩らした幾つかを補足として書いてみたい。

* 石黒耀「死都日本」2002 年発表

本職は医者石黒耀が 02 年に「死都日本」の中で、霧島火山帯の超巨大噴火を書き、火山列島に住む日本人に警鐘を鳴らし、「破局噴火」という造語を創り第 26 回メフィスト賞を受けた。その後も「富士覚醒」（2006 年）を著わし大災害小説の分野で小松左京「日本沈没」（1973 年）の後を継いでいる。

* フィリパ・ピアス「トムは真夜中の庭で」1958 年発表

作者、フィリパ・ピアスはケンブリッジ上流のグレート・シェルフォドの製粉工場生まれ、父から凍結の激しかったキャム川を、ケンブリッジからイーリーまでスケートで滑った時のことよく聞かされていた。それは、1883 年のクラカタウ大噴火後の「火山の冬」から若干後になるが、1895 年の冬のことであった。

柱時計が 13 時を打つ——裏庭でのトムとハティの出会い——ハティはバーソロミュー夫人の少女時代——舞台はキャム川沿いのケンブリッジ下流の町、イーリー。

魂＝アニマ： 魂はモノが普通に存在するような意味では存在していない。しかし、それは「在り間」に存在する。今日と明日の間、心と体の間。トムはその「在り間」の時間に入り込むことができた。トムにとっての「秘密の時間」である。そこでハティという女の子に出会い、会うたびに幼くなったり年を取ったりする。

ハティは、大家さんで 13 時をうった古時計の持ち主・バーソロミューというおばあさんの幼い時の姿なのであった。

孤独の中で過去の庭の世界に生きていたバーソロミュー夫人と、両親から離れ孤独を感じていたトムが、「たましいの庭」で会い孤独を癒されていく、という物語。

* ジェーン・オースティン「エマ」、1815 年 12 月発表

「リンゴの花は夏至の頃咲いていた」とエマはいう。イギリスでは五月に咲く花だ。

オースティンの勘違いでは、と議論を呼んできた。だが、本当に遅れて咲いたのだ。オースティンが「エマ」を執筆していた時は、異常に寒い冬と冷たい夏に見舞われた。カリブ海のセントビンセント島のスプリエール山とインドネシアのアウ山（1812年）、鹿児島への諏訪之瀬島（1813年）、フィリピンのマヨン山（1814年）など大規模な火山噴火が続き異常気象が一段と激しくなった。とくに、1815年3月に書き終わり、推敲していた4月にインドネシアのタンボラ山が大噴火を起こし寒冷化が進行した。1816年は「夏が来なかった年」で、7月は雨が良く降り、野山では花があまり咲かなかった。オースティンは異常気象の情報もなく夏至の頃に咲いたリンゴの花を見たままに作品の中で描写した。

参考図書

Philippa Pearce: Tom's Midnight Garden Harper Trophy 0812

河合隼雄：「物語とふしぎ」 岩波書店 1996年

石黒耀：「死都日本」 講談社文庫 2008年（2017年）

(2018.10.15)

(2018.10.23 修正)